第１８９号

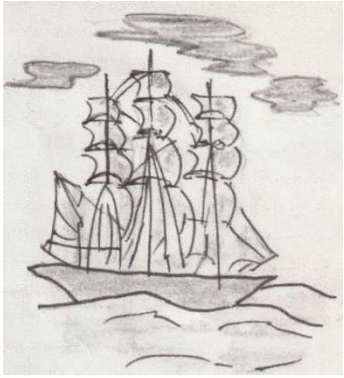
芥川だより

発行日＊２０２２年１０月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
発行 人　　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

急激な円安が物価高を招く



いつもは、為替の動向に注意はしないが、数年前に家内が保険会社の人にドル建ての保険をすすめられて「あんた、どう思う」と聞かれたので「一ドル 102 円でドルを買うのは問題ない。政府も円高は容認しないから 1 ドル 120 円ぐらいにはなるだろうから、その時に売れば利益は出る。この商品は保険というより為替差損で利幅を狙う投機商品だから、株のように売り買いをしないと儲からない。

このような商品を保険といって売りに来る外交員もあまり知識がないようで従来型の保険のように扱っている。郵便局で投資信託を販売し出したころ、私は強い不信感を持った。投資信託を郵貯のように売るのは詐欺的な行為と変わらない。いくらアフラックが郵貯の資金を欲しがっていても、こんなやり方は許されない。後々で大きな問題が必ず起きる。その問題は元金が保証されない点にある。ましてや外国債券であれば為替の変動によって大きな損失が生まれる。

家内の調子が良い、円高の 102 円で買った債権が 130 円…と異常に円安に振れ出してきた。当面は、135 円あたりが山だろうと思っていたので、もうそろそろ売ったほうが良いんじゃないの、とアドバイスしたが全く聞く耳持たずに大事に抱えたままだ。家内の様子から満期まで抱えていて為替差益は関係ないとも思えてきた。ワクワクした夢を見さしてもらっただけでもいいのかもしれない。

為替の大きな変動は貿易に大きな影響をもたらす。４割も円安が進めば輸入品が高騰する。輸出業者は大儲けできるが、雇用者の賃金高へはつながらず、インフレと賃金の減少というスタグフレーションという困った経済状況を招く。米欧諸国とは違った不況だ。大企業の含み資産は 700 兆円ともいわれる。今こそ思い切ってその資産を労働者へ還元する時だと思う。法律でもって保護されてきた大企業優遇税制を変えて物価も上がるが賃金もあがる、という正常な資本主義の流れにするのが、いま一番大事な政治的な課題だ。

死をめぐるあれやこれ（９５）

石川　吾郎

国民を助けない政府

この秋は、ほとんどあらゆる商品が値上げされて、どんなに節約を心がけても生活費の上昇に歯止めがかからない。とくに食料品や電気・ガス料金の値上がりは今後どれほどになるのか想像ができない。これがどこまで続くのか、どれほど私たちの生活を直撃するのか、不安におそわれる。さらにここにきて、後期高齢者の医療費の窓口負担分が倍増され、老人が体の具合が悪くなってもおちおちと病院を受診することができなくなってしまった。とまらない円安と、戦争の影響による物資の不足。こんな状況になっても政府は国民をまともに救おうとしない。◆一番効果が高いと言われる消費税減税を行うそぶりは一ミリもない。生活支援は非課税家庭のみという制限をかけて、微々たる予算執行にすぎない。これでは我々の生活はどんどん破壊されていくことになる。岸田首相は賃上げの方策として労働移動の円滑化をあげているが、これは首切りをしやすくするものでむしろ賃金を下げる方向になるものだし、インボイス制度も個人事業主を直撃し、海外からの安い労働力の受け入れも、国民の賃金を下げる圧力としかならない。やることなすことが、国民を貧困化させて一部のグローバル企業や海外投資家にもうけさせることになることばかりなのだ。◆なお消費税はだれの所得も増やすことなく、消費に対する罰則に他ならないこと、また社会福祉に使われる財源でもないことは、すでに事実として明らかにされていることは知っておこう。

芥川だより一八九号　目次　ページ

巻頭エッセイ　下村嘉朋　1
巻頭コラム95　石川吾郎　1
素老人☆よもだ帳　１０３　坂本一光　2
哲学爺いの時事放談53　祖蔵哲　2
大峰奥駆道59　下村嘉朋　3
新型コロナウイルス愚考　その26　明石幸次郎　4
オクラの山たより73　因了生　4
隠された歴史48　満田正賢　7
プロパガンダに騙されるな　学び直そう戦争と憲法の歴史（七）　成瀬和之　9
俳句　土田裕　影山武司　11
編集後記　ＳＫ生　11
ふみの道草52　山椒魚　12

素老人☆よもだ帳（１０３）

坂本　一光

◆政治の堕落

九月二十七日、国論を二分したまま安倍晋三元首相の「国葬儀」が執り行われた。二分と言ったが、どの世論調査を見ても反対の声が賛成の声を大きく上回っていた。悲劇的な死を迎えたことと、そのことをもって彼が在任期間最長の総理として為したことを最大限に美化する国葬儀とが全く別のことであることを、日本国民は示した。彼が「戦後レジーム」からの脱却と称して目指したことを、国民が明確に否定した意味は大きい。

それにしても、彼が「凶弾」に倒れたことであらためて日の目を見ることになった、日本の支配勢力の底なしの政治的堕落には呆れるほかない。「勝共」と「宗教」に名を借り、霊感商法で世間を騒がせた統一教会が、これほど我が国の政治の中枢に食い込んでいたことが、その一部とはいえ闇の世界が見事に白日のもとに晒されたのである。安倍元首相の死がその闇を暴いたとは、「天網恢恢疎疎にして漏らさず」のたとえどおり、何とも皮肉なことであった。選挙に勝ち政権を維持するためには、権力はどんな闇の勢力とも手を握ることを、実によく典型的に示す事例となった。「おぬしも悪よのう」と口にしなくとも、心の中で通じ合っていたのだろう。とりわけ、「愛国」を唱え強制し、自らに反対する勢力を「反日」といって誹謗し排除する者たちが、こともあろうに、かつての日本の植民地支配を口実に日本から金を吸い上げることを公然とめざした「反日宗教」と言うべきものとしっかり手を組んでいたのだ。こういうときにしか使えない、「売国奴」「国賊」とでも言うべき許されない行為であり、彼らに日本の政治を担う資格はない。それをいつまで許すのか。

政治の堕落は、様々な分野に波及し権力の堕落をもたらす。それは、世間を騒がせている東京五輪組織委員会元理事と数々の五輪スポンサー企業幹部をめぐる贈収賄事件にも表れた。季節は秋、まさしく、

水澄むや五輪の闇の底が見え

となった。誰が言ったか、

アベのムチ世間知らずと恥知らず

を、権力を自任する彼らも地で行ったということに過ぎないのだろう。

岸田政権は、国葬儀でチャラにしたかった元総理の罪を自覚していたと思う。

ツボ・ゴリン・モリ・カケ・サクラご破算に

そう願った挙句に、ようやくにして臨時国会が始まる。多くの国民が、この国の行く末を見守っている。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

「哲学爺い」の時事放談（５３）

祖蔵　哲

『国葬の哲学』

英国エリザベス二世の国葬が９月１９日に行われ、一週間ほど後の２７日に安倍元首相の国葬が強行された。かの国とは違い、日本では国葬は法的に制定されていない。そこで政府は無理やりに根拠を作り出した。その一つが「民主主義を守り抜く」だそうだが、これは完全に自己矛盾である。なぜなら国民の半数以上が「国葬反対」だからである。多数決が民主主義の決定方法であるとしたらどう考えてもおかしい。このような矛盾は自己分裂を招くが、その通りに国は分断されていまっている。そして権力は「敵の敵は味方だ」という理屈で世論を操る。このような「敵と味方」のアメリカ型分断専制政治はすでに日本に上陸しているのである。さらに混乱は２日後の国交正常化50周年の節目にも影響を及ぼした。本来なら事前に盛り上がるはずの式典ムードは近年の両国の関係をも反映してかさらに冷え込み関心は遠のいた。

さて、今月は「葬儀」を哲学してみる。しかし、いろいろと調べてみても哲学と葬儀との関連は薄い。関係が圧倒的に深いのはやはり宗教である。死の問題は宗教の領域と深いかかわりがある。宗教と

いうものは、大きく二つの領域からなっている。一つは、自分が生きている世界がどのように生じ、何処へ向かっていくのかについての世界観ともいうべき領域。もう一つは、自分自身の存在についての疑問にかかわる領域、死生観である。

人類が初めて宗教的な意識を抱いたのは、人間は死すべき存在だと意識したからである。現生人類の直接の祖先たちは、ネアンデルタール人を含めて、埋葬文化をもっていたとされるが、埋葬とは死にかかわる文化である。人類だけが死者を埋葬する。それは人類だけが、死の意味に拘っていることを表わす。死の「儀式」という方面では文化人類学が様々なその機能の説明をしている。

葬儀には、大きく三つの基本的機能があると言われている。一つ目は、亡くなったことの確認。今回の「国葬」の場合は白昼の暗殺という明確な状況があったが、密かに亡くなる場合もあるから、公に知らせると役割がある。二つ目は、亡くなった人との関係を構築し直す「死者との和解」である。生前に敵対関係があったとしても「死」の前には人間はすべて平等という考えがある。この和解によって自分自身も解放される機能を持つ。

最後の機能が残された共同体の結束の確認である。葬儀というものは本来、親戚家族、あるいは顔の見える共同体内で行う儀式である。そこでは故人が欠けても、その共同体を再び維持していこうという再確認が必要であった。しかし、「国葬」は国という「想像の共同体」で行われるものである。近代国家は村社会ではない。そこに国葬が入る余地はないはずである。

ここからは、いつもの論理的な批評と少しずれるが、与太話に付き合ってほしい。それは「令和」という元号である。２０１９年に平成から改元された「令和」であるが、制定当初からその銘々について数々の議論があった。万葉集からとられたというが、その説明に反して「令」のイメージは「命令」「零点」「冷淡」「冷血」など否定的なものが多い。しかし、最終的に決定したのは『美しい国』へという本も著した復古主義者の安部元首相であったというのは暗示的だ。不吉な予感は次々と実現していった。まず、改元直前、政府は駆け込むようにオウム真理教事件の13人の死刑確定者に対し死刑を執行した。そしてコロナ禍、さらにウクライナ戦争。今、令和の銘々者が亡くなった。「死」がつきまとう文字通り冷酷な時代が実現している。周知のように世界中で元号を使用しているのは日本だけだ。元号の役割は凶事を避けるという習わしからしい。平安時代には何度も改元されたと聞く。そんな姑息なことをせずに元号は即刻廃止するのが望ましい。

大峯奥駈道（５９）

下村　嘉明

体験型人間学　９

先日、甥っ子が東京から来て一泊していった。仕事があったのでゆっくりと話をすることはなかったが、なかなかすごい話だった。

彼は、イタリアン料理のシェフを大学中退後続けている。３５歳である。

「コロナの影響はすごいやろうなあ」と聞くと「コロナが始まると周りにある半分の店は閉店した。少し収まって再開した店は半分。半分は閉店したままです。」「閉店せずによく続けているなあ」少し中身を聞く。「スタッフは何人」「４人、中が２人、外が２人」「客席は」「３０席」客単価は５千円、予約客が半分、一日の売り上げが３０万、客数６０人。

彼から話を聞きながら、飲食業界の厳しさを改めて知らされた。多くの店がつぶれている中で生き残れる店の大きさや客層などが状況に合っていたのだろう。

特に、大きな店や中高年層の多かった店は厳しい。これまでのように団体客などを相手にしていたら、コロナで来なくなってしまい閉店だ。

感染症、ウクライナ戦争による食料・エネルギー不足、円安による海外からの輸入品の高騰。特に気になるのが、ベトナムなどから出稼ぎに来ている若者たちの動向だ。円安が彼らの国の通貨であるドンとの交換レートが大きく変化して円への魅力が下がれば、出稼ぎ先を変えるだろう。これまで日本の工事現場で働き続けてきた彼らがいなくなったら工事が出来なくなる零細な工事業者はたちまちにして廃業だ。こんな心配をしていたら、ベトナムがダメならバングラデシュがあるから心配しなくてもよい、と知り合いは言う。

確かに貧しい国は、まだまだあるから、日本への出稼ぎはなくならないかもしれないが、逆に、日本から外国へ働きに行く人が増える可能性がある。知り合いの子供さんは、大学卒業後、シンガポールの日系企業に就職した。日本に比べ生活しやすいとか。これからは、外国で働くのが当たり前になるのかもしれない。

それにしても、国が貧しくなるという事は、恐ろしいことだと考える。米国の金利が高く日本の金利が低いから、投機筋が円売りドル買いを仕掛けた結果なのだが、金融市場の破壊的な力を感じる。儲かりさえすれば、投機の対象になったモノがどうなろうと関係ない、たとえ国が破綻しようが構わない。恐ろしい投機集団の力だ。今回は、国際協調が各国の思惑違いで出来ないから、投機筋は円売りに出たのだ。

私の予想では、円安は落ち着くだろうが、元のようにはならない。物価高が続くことを覚悟しなければいけない。対策

としては、賃金を上げるか、生活費を下げる政策をするかしか方法はない。しなければ、本当に不況の嵐が来る。

新型コロナウイルス禍愚考（その２６）

明石　幸次郎

人気タレントの明石家さんまは、サインを頼まれたら「生きているだけで丸儲け」と書くらしいです。「死んだら、損や、況して自分から死ぬなんかアホや」と言うことなんですか？生きているとしんどい、辛い、苦しい、どうしようもないと感じるときは、死んでしまいたい、死んで楽になりたい、死んだ方ましやと思うことはあります。

死にたいと電話を掛けてくる匿名の人に「さんまも言ってるよ。死んだら損やで、生きているだけで丸儲けや。生きるように考え直して！」などとこちらが必死に応えても相手には通じないと思われます。

死にたいと思うのは「異常な現実に対する正常な反応である」とも言われます。人間関係で信頼感を感じている友人、さんまとか鶴瓶のような有名タレント、高僧などの宗教家、精神科医が死にたいと訴える相手にじっくり耳を傾け、なぜそのような心境になったかを相手がしゃべり終えた後で「死にたいという気持ちもわかるけどなあ、まあ何やかや生きていたらしんどいこと、苦しいこと嫌なこともあるけど、少しは楽しいこと、面白いこともある。笑うこともあるで、生きているだけで丸儲けやで！」と言われたら死にたいと訴える相手も「少し、考えてみますわ？」となるかも知れません。最も宗教家や、精神科医はそんな俗的な言葉は使わないと思いますが。

「死にたい」の前段階で「消えてしまいたい、いなくなりたい」などの言葉が出てくる人は幼いころに親からのDV、無視、いじめ、先生、他人からの厳しい叱責などを受けて否定的な自己のイメージが定着してしまい、自己肯定感が低くなっています。それが、苦しい時に乗り越えていくマイナスの力になってしまい、自分は何やっても駄目だと自己を否定してしまうようです。

そのように苦しんでいる人に自分の倫理観、道徳観、死生観を持って「死んだらアカン、生きたら得やエエこともあるで」と説得することは、却って有害になるようです。「この人は、自分の苦しみを全然分かってくれない」となってしまいます。

苦しむ相手に対し必要なのは、正論や説得ではなく、「死にたい」という感情、気持ちを否定せずその背景にあるものを具体的に聞いて（なかなか難しい）共感、共有すること。そして、原因にじっくりと耳を傾け、それに共感、寄り添うことで相手は、心を開こうと思えるかもしれないものです。

電話の匿名の死にたいという相手に声だけで、相手が苦しい背景をじっくりと耳を傾け、共感して聴こうとしてもそれが逆に「私が死にたいのに聴くだけで何をしてくれるんや、何もしてくれへんやん、何がいのちの電話や！」と深夜に４時間以上話をじっくりと聴いていた相手の女性から、がちゃんと電話を切られました。この時は流石にこちらの心が折れて、どっと疲れが出ました。帰路につく間、自分なりの結論は、あれだけ自分の事を正当化し、全て世の中、自分と関係を持った役所、相手（私も含む）の対応が悪い、自分は犠牲者で可哀そうな自己愛をもった人格解離的な女性は、絶対に自ら命を絶たない、死なないという確信は持ちました。それだけでも確信したので、聴くことにより少しは自分が成長した？　と自分が都合の良いように解釈しました。

オクラの山たより（７３）

困了生

一

「葛」は秋の代表的な季語です。紅紫色の花が房をなすさまは風情のあるものですが、葛という植物は繁殖力が非常に強い植物で長いツルを伸ばして谷間などをあっという間に埋め尽くしてしまいます。葛によって野原一面がおおわれている様子を「真葛原」といいます。緑の葉の裏側は白っぽく、秋風に吹かれて一斉にひるがえる白い葉裏はよく目立って美しい風景です。

もちろん、葛は見て楽しむだけではなく日本人にとっては古くから生活と深い関わりを持つ草でした。たとえば茎の繊維で織った葛布は狩衣や袴に使われました。根はデンプンが多く含まれ葛粉とされて葛餅の材料ともなっています。葛粉に砂糖を混ぜ熱湯注いでかき混ぜた葛湯は飲みやすく幼児・病人に用いました。葛湯を冷ましたものが葛水。昔、ヒンヤリとして甘い葛水は夏を代表する飲み物でした。乾燥させた根を漢方では葛根といわれ煎じて飲めば解熱、解毒、滋養に効果があるとされました。蕪村にも次の句があります。いずれも安永九年、蕪村六十五歳の句です。

① 葛水や鏡に息のかかる時
② 葛水に見る影もなき翁かな
③ 葛水に映らでうれし老いが顔

①と②の二句は蕪村と親交のあった神沢杜口の古稀の祝いに贈った本文にある句です。杜口は京の町奉行の与力を務め、隠居後は著述・俳諧に打ち込みました。一七九五（寛政七）年、八十六歳で亡くなりました。杜口の随筆「翁草」は自身が見聞したことだけでなく当時の諸記録なども収録していて近世後期の京の様子を窺うことのできる好随筆です。森鴎外の「高瀬舟」のネタ本としても名高い著作でもあります。

漢詩文や故事の好きな蕪村は唐の詩人の張九齢句や石川丈山が老いの身を恥じたという故事から「葛の翁」を書き始めます。

ここに一人の隠士あり。いづれのところの人といふを知らず。常に葛てふものをたしなめば、人呼びて「葛の翁」といふ。もとより青雲権貴の地をいとひて、…中略…資朝の卿に逢い奉らざれば、むく犬のそしりもなし。ただ生前一盃の葛水、身後の栄声にかへなまし。

「青雲権貴の地」とは「とても身分が高く強い権力を持った地位」のこと。「むくいぬのそしり」とは鎌倉末期の公家日野資朝の故事からくる言葉です。西園寺内大臣が西大寺の静念上人の老いこんだ姿を「すばらしい」と尊んだのを受けて、資朝が老いたむく犬を西園寺公に差し上げたという話。蕪村が大好きであった「徒然草」の第一五二段にある話です。要するに資朝は静念上人と老犬、どちらも「老いさらばえているだけさ」と西園寺公をからかったのです。老人の杜口が資朝に会うこともなかったので「老いぼれ」のそしりを受けることもなかったが、「ただ生前の一盃の葛水を死後の名声にかえているのだろう」と「葛水の翁」というあだ名をつけられたことを弁護しています。

されば、清濁明晦のさかひ、是不是いづれぞや。しかじ、清からんよりは、むしろ濁らんには、明らかならむよりは、はた暗からんには。

① 葛水や鏡に息のかかる時
② 葛水に見る影もなき翁かな

「清濁明晦」とは「清と濁、明と暗」のこと。「清と濁、明と暗、そのよしあしはどちらであろうか。及ぶことはないだろう、清いことは濁っていることに、明るいことは暗いことに」と述べて二つの句となります。

①の句意は「葛水よ、その濁り具合が鏡に息のかかった時のようだ」。杜口が老いの我が身を恥じることなく葛水の濁りや薄暗さまでも愛したことを称賛した句です。灰色に濁った葛水は飲みやすい飲み物で老人が好んで飲んでいたのかも知れません。

②の句は「見る影もなき翁かな」だけを見ると老人をからかっている句とも見えますが、前にある文章のつながりから言えばやはり杜口の古稀を祝う賀句でしょう。老いたる姿を濁った葛水に映すと、葛水の濁りと同化してしまうくらいだ、しかし、それでよいではないか、老いを強く肯定する句ととらえるべきです。

この句の作者の蕪村も六十五歳。古稀にはまだまだでしたが当時としては十分な老齢です。杜口の古稀の祝いに「老いるなんてことは恥じることではないですよ」と言っておきながら内心は複雑であったことを示しているのが、③の句です。この句の前には唐の詩人張九齢の詩「鏡に照らして白髪を見る」と後水尾院の招きを断った石川丈山の和歌が配されています。内容はともに老さらばえた自分の姿を恥じたものです。その後に③の句があります。

③ 葛水に映らでうれし老いが顔

濁った葛水には老いの顔は映らないので嬉しい、とのべるこの句の一般的な解釈は「葛水の濁りのおかげで老いを映さないから、なあに老いを恥じて卑下することはないさ」と逆転の発想をしているというもので、老いていく自分の姿と生き方を強く肯定する心境を述べている句だとします。しかし、まわりの若い人たちに「こんなんは、どうってことないわい」と妙に強がってみせるのも老人の常です。それは自ら抱える身体（知力、体力、容姿）の衰微への不安と恐れの裏返しの感情と取れなくもなく、「老いを受け入れる」という感情の底にやはり「いや、やっぱり、あかんわ」という気持ちがうごめいていたのではないかと想像するのです。古稀を越えた筆者の経験から言っているのですが。

二

葛水を愛飲した神沢杜口に古稀祝いと関わって思わず「老い」の話になりましたが、葛にはもう一つ落としてはならない話があります。先ほど述べたように葛の裏側は白っぽい色をしています。風に吹かれて一斉に裏返った葛がしげった野原はみごとなものです。そのため葛には裏を見せる「裏見」というイメージがついて回りました。さらに「裏見」は「恨み、怨み、憾み」とつながっていって葛と「うらみ」はワンセットのようになったのです。古い例としては「古今和歌集」にある平貞文の次の歌があります。

A　秋風に　吹き裏返す　葛の葉の

うらみてもなほ うらめしきかな

「秋風に吹かれた葛の葉の裏を見るということが世にはあるが、私はうらみつつも（葛の葉の裏をずっと見ていても）、まだ恨めしさが解けそうにない」という歌の意味ですが、「の」「うら」の同音のくり返しが快く響きますが、作者の陰鬱な気分が上の句の情景によく表れています。

「裏見」＝「恨み」をベースにしてもう少し手のこんだ歌に「新古今和歌集」巻第十一には次の歌があります。歌の後に解釈をつけます。

B　わが恋は 松を時雨の 染めかねて
　　真葛が原に 風さわぐなり

（私の恋は、松を時雨が紅葉させることができないでいるように、思う人をなびかせることができず、真葛が原に、葛の葉の裏を白々と見せながら風が騒いでいるように、恨みの心が騒いでいるようだ）

「松を時雨の染めかねて」は、じれったい恋情を暗示し、それが「真葛が原に風さわぐなり」の恨み心の暗示を自然なものとしています。そのことによって妖艶とでもいうような不思議な雰囲気を歌全体にかもし出しています。

歌の作者は天台座主を何度も勤めた慈円。関白藤原忠通の六男で日記「玉葉」を後世に残した関白九条（藤原）兼実の弟であり歴史理論の書ともいえる「愚管抄」を書きました。妖艶ともいえる歌を仏に仕える僧の最高位の人が作っているのは興味あるところです。

こうした「裏見」＝「恨み」の流れから蕪村の次の句が生まれます。この句には短い前文が着いています。

④　葛の棚葉しげく軒端を覆ひければ、昼さへいと暗きに

　　葛の葉のうらみ顔なる
　　細雨（こさめ）かな

前文に「葛の葉が棚状に生い重なって繁っているので、昼間でもとても暗いので」とある後に書かれた句の内容は「秋の長雨に降りこめられ、秋風に思う存分は裏を返すことができないので葛の葉は恨み顔しているようだ」となります。「葛の棚葉」と「細雨」の両方に閉じ込められてしまった作者の鬱々とした感情を葛の葉に託して感情移入した句といえます。先ほど示したAの歌、「うらみてもなほ うらめしきかな」の平貞文の歌を踏まえた句です。

三

「葛の葉」と直接に関わる歌ではないですが、葛の葉に少しばかり縁のある蕪村の句を紹介します。

⑤　老いが恋 忘れんとすれば
　　時雨かな

一見「葛の葉」とは何の関係もなさそうですが、蕪村五十九歳、一七七四（安永三）年九月二十三日付、太魯宛の書簡を見ればそうでもなさそうなのです。

几董会当坐　時雨

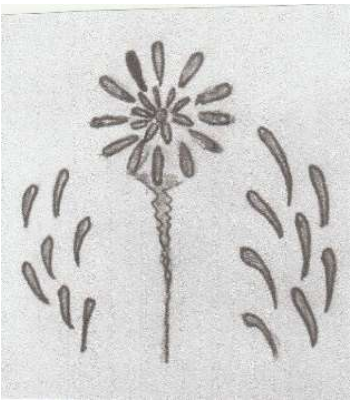
老いが恋 忘れんとすれば 時雨かな

しぐれの句、世上みな景気のみ案じ候ふ故、引き違え候ふていたし見申し候ふ。「真葛が原の時雨」とは、いささか意匠違ひ候ふ。

「几董会当坐　時雨」とは几董主菜の句会で出題された「時雨」で作った即興句のこと。

「時雨」はよく使われる句の題材です。蕪村の生きた時代までもおそらく数限りなく詠まれた作品があったはずです。「景気」とは「様子・景色」のこと。時雨の叙景の句を世の多くの人はあれこれ思案しているとまず言い、だから、というわけで自分は「引き違え」つまり「期待を裏切って・予想を裏切って」句を作ってみたというわけです。句を作ろうとしたとき蕪村の念頭に真っ先に浮かんだのは慈円の「わが恋は 松を時雨の染めかねて 真葛が原に風さわぐなり」という歌だったでしょう。しばらく降るかと思えばさっと晴れる「時雨」は行きつもどりつして恋に悩む心境を表現するには好適な素材です。慈円の歌では時雨が降っても松の色が変わらないようにちっとも自分の恋する思いが達せられない恨み、懊悩が書かれているのに対して、蕪村は「老いが恋」という俗世間が許さぬ「恋」が意志的に断ち切ろうとしても断ち切れないという執着を詠んだ点が慈円の歌とは「いささか意匠が違」うというのです。

この⑤の句がまったくのフィクションの句かどうかは不明ですが、五十九歳という当時の世間一般の常識からすればもはや老境に達していた蕪村の心の奥底に、まだ恋に焦がれる熱い気持ちがくすぶっていたらしいとはいえそうです。門人たちにその成り行きを案じさせた祇園の芸妓小糸との蕪村の「老いが恋」騒動は、安永九年のこと。そのとき蕪村は六十五歳でした。



隠された歴史（４８）

満田　正賢

「隠された歴史（5）」で、六世紀初頭から七〇一年の「大宝」建元まで連続する年号（九州年号＝倭国年号）が多くの書物に残されていることをご紹介しました。そして「隠された歴史（7）」では、近畿王朝に近い書物の中にも九州年号が残されているが、その中にある年号は本来の九州年号と年次が異なっていることを指摘しました。今回はその内容を掘り下げて、「大化」「白雉」「朱鳥」という九州年号が日本書紀に記された経緯、及び「朱雀」「白鳳」という九州年号が続日本紀に記された経緯を明らかにしたいと思います。

まず、「隠された歴史（7）」で触れた内容を整理し直してご紹介します。

①日本書紀、続日本紀とは別に、近畿天皇家に近い書物である帝王編年記、皇代記、皇年代略記、本朝皇胤紹運録、（扶桑略記）、に九州年号の記載がある。

②各書に記載された九州年号の年次と、九州年号を一番正確に記していると思われる「二中歴」の年号の年次とが異なるものは次の通りである。

・（孝徳）大化（元年＝六四五年）は二中歴その他の書物にある九州年号にはない年号である。

・白雉（元年＝六五〇年）は二中歴六五二年と異なるが、永光寺文書では六五〇年であり、一致している可能性もある。

・白鳳（元年＝六七二年：扶桑略記では六七四年）は二中歴その他に六六一年とあり異なる。全集「神道大系・神宮編・皇代記」の註釈では「天武天皇の元年を白鳳元年とするものである」としている。

・朱雀（元年＝六七二年）は二中歴六六四年と異なる。

・朱鳥（元年＝六八六年）は二中歴と一致する。

・持統大化（元年＝六九五年）は二中歴と一致する。

③各書は天武・持統・文武期の九州年号の記載内容によって三つのパターンに分かれている。

A：皇代記、皇年代略記、本朝皇胤紹運録

・天武期：朱雀一年（干支の記載なし）

・天武元年＝白鳳元年、白鳳元年＝六七二年、白鳳年間は十四年続く

・白鳳十四年＝朱鳥元年、朱鳥元年＝六八六年

・持統期に朱鳥が七年続く

・朱鳥の後、持統期に大化が三年続く

・文武即位後も大化が続く

・大化五年＝大宝元年

B：帝王編年記、（扶桑略記）

・パターンAの①②③は同じ。但し扶桑略記には朱雀の記載がなく、白鳳元年は天武三年（六七四年）。

・持統期には九州年号の使用がなく、文武期に大宝への改元は記載されているが、その前の年号の記載はない

C：日本書紀

・天武の即位に伴う年号の記載はない。

・天武十五年（崩御年）＝朱鳥元年、朱鳥元年＝六八六年

・持統・文武期には九州年号の使用なし

④天武・持統・文武期の九州年号の記載パターンに関する考察

・取り上げた近畿天皇家に近い各書の記載内容は日本書紀と同一ではない。近畿天皇家に近い各書が近畿天皇家の正史である日本書紀にないものを後代に創作することは許されないことであると思われる為、日本書紀以前に成立していた元資料があり、日本書紀を含む各書がその一部を使用したと考えざるを得ない。＊この元資料を仮に資料Xと呼ぶ。

・孝徳期については、九州年号と年代が違う「大化」と九州年号にある（年代も同じ可能性がある）「白雉」との組み合わせで九州年号が記されていることが非常に奇妙である。孝徳期の九州年号の使用については検討課題を残す。

・資料Xの天武期から文武期まで（大宝が建元されるまで）の記述に九州年号が連続して使われていたことは間違いない。

・皇代記では朱雀元年と白鳳元年を同じ壬申としており、朱雀は短期で消滅したかのように記している。天武崩御年は朱鳥元年（六八六年）であり、天武期と白鳳期を一致させる為に意図的に白鳳期の年代を改竄した結果、本来白鳳の後に続くべき朱雀が白鳳の前にはじき飛ばされたのではないか。

・天武・持統期の九州年号の記載パターンを考えると、パターンAの記載内容が最も資料Xに近いと考えられる。パターンBは、資料Xにある孝徳大化と持統大化という二つの大化年号の存在を避けて持統大化を削除したと考えられる。更にパターンC（日本書紀）は、パターンBに加えて資料Xにある白鳳年号が、各地に残された白鳳年号の年次と一致しないという事実を考慮して、天武期の白鳳年号を削除したものと考えられる。

⑤各地に残る白鳳年号についての考察

・白鳳年号は日本各地に残っている。しかしそれは二中歴その他に記された九州年号の白鳳（六六一年～六八四年）で記されたもの（A群）と、天武期を白鳳年間としたもの（六七二年～六八六年）で記されたもの（B）群）に分かれている。

・各地に残るA群とB群の数を見ると、二中歴等に記載された本来の九州年号の年代であるA群より、資料Xに記載されていたと想定出来るB群の方

が、圧倒的に多く残されていることになる。

ここからは、今回新しく考えた日本書紀と続日本紀に出現する九州年号の成立経緯に関する考察です。

まず、近畿王朝は日本書紀編纂の前に、天皇家の系図と即位年次を創作する必要があったと考えられます。その天皇家の系図と即位年次を創作したものが「隠された歴史（7）」で仮に命名した資料Xではないでしょうか。資料Xは大宝年間に作られた可能性が高いと考えられます。なお、日本書紀三十巻には失われた系図一巻が附属していたとされていますが、資料Xがその失われた系図そのものである可能性もあります。

資料Xの中で、推古以前の天皇家の系図については、すでに蘇我馬子が「天皇記」によって創作していましたので、それを一部改竄して利用したと考えられます。

「隠された歴史（46）」で考察したように、乙巳の変によって蘇我本宗家（入鹿）が倒され、（後期）九州王朝が権力を奪還し、孝徳・中大兄が（後期）九州王朝の配下となったとすると、孝徳期以降については、九州王朝の年号を元に近畿天皇家の系図と即位年次の作成を始めたと考えられます。

そこで年号を架空の近畿天皇家の即位に合わせて改竄する作業が始まりました。第一に行なわれたのが、白鳳年号を天武の年号とする作業です。すなわち「隠された歴史（7）」で述べた白鳳年号のA群をB群に変えたことです。その結果、白鳳期（A群）に含まれていた斉明期、天智期の本来の年号が使えなくなりました。そこで斉明紀、天智紀から年号が消えたと考えられます。

もう一つの作業は、乙巳の変のあとの九州王朝の改革を孝徳天皇の改革に変えたことです。資料X作成チームは、その作業に於いて一つのアイデアを導入したと考えられます。そのアイデアとは、乙巳の変の二年後に始まった九州年号の「常色」を消して、孝徳天皇と同じ「軽皇子（かるのみこ）」の名前を持つ文武天皇が九州年号大化三年に即位した後「大宝」年号建元までの五年間の出来事を、乙巳の変の直後の出来事に付け替えるというものです。その結果「文武大化」五年間が「孝徳大化」五年間に化け、年号の名前ごと移されるという結果になりました。本来の九州年号の「常色」に続く「白雉」は「孝徳大化」五年間に繋がれたため、「白雉」も二年前倒しとなったと考えられます。

以上の作業の結果出来上がったのが、近畿天皇家の系図パターンA（皇代記、皇年代略記、本朝皇胤紹運録）です。そして孝徳大化と持統大化の重複を避けたのが、パターンB（帝王編年記、扶桑略記）です。

日本書紀は、パターンA・Bの近畿天皇家系図が完成されたのちに編纂が始まったと考える事ができます。しかし、日本書紀編者は、近畿天皇家系図の最大の眼目であった天武白鳳を消しました。その理由については、九州年号白鳳の存在を消すことが出来なかったという可能性もありますが、天武（大海人）が筑紫都督であった為に、独自の年号を使っていた事実を唐に対して伏せておきたかったという可能性の方がより高いと思われます。天武が筑紫都督であったという可能性については「隠された歴史（20）」で触れています。

ここで、各種縁起に記された古代年号が「干支と年号の対比表」を用いて作られたということについて触れておきます。

各地の寺社縁起に「九州年号白鳳」と「天武白鳳」という二つの異なった年号が記されているということは、二中歴（九州年号）系統と皇代記（資料X）系統の二つの異なった「干支―年号対比表」が存在したことを暗示させます。そして各地に残るA群とB群の数に圧倒的な差があることは、大半の縁起が皇代記（資料X）系統の「干支―年号対比表」を用いて記されたことを推測させます。

多くの寺社縁起は皇代記（資料X）系統の「干支―年号対比表」を用いて作成された天武期の各種縁起が皇代記（資料X）系統の「干支―年号対比表」を用いて記されている可能性が高いということは、天武期以外に於いても、皇代記（資料X）系統の「干支―年号対比表」が各種縁起の制作時に参考資料として用いられていた可能性も高いということを意味します。各種縁起には、「〇〇天皇御代」という記述が記されていますが、これは日本書紀が記した各天皇の年齢・在位期間を繋げて一覧表にしたものを、各寺社に残されていた干支の記述と照らし合わせて「〇〇天皇御代」としたものと考えられます。もちろん一部に二中歴（九州年号）系統の「干支―年号対比表」によって作成された縁起が存在することも確実です。

次に、続日本紀に残る「朱雀」「白鳳」の意味を考えてみます。日本書紀は持統天皇で終わっており、次の文武天皇からは続日本紀に記載されています。「朱雀」「白鳳」は、文武天皇の子であり、天武・持統天皇の曾孫にあたる聖武天皇の詔勅に出てきます。聖武天皇の詔勅の内容とは「白鳳より以来、朱雀より以前、年代玄遠にして、尋問明め難し。・・・」という文面です。

通説では「白鳳」は「白雉」を、「朱雀」は「朱鳥」を誤記したものとしていますが、いかにも苦しい解釈です。一方、本来の九州年号では、朱雀は白鳳の後に続く年号ですので「白鳳より以来、朱雀より以前」では意味が通じません。しかし、資料Xではその順序が逆転していますので意味が通じます。すなわち「白鳳より

以来、朱雀より以前」とは、聖武天皇が皇代記（資料X）系統の「干支―年号対比表」を参考にして詔したものであり、聖武天皇が言わんとしていたのは「天武天皇以来、天武天皇以前」という意味であったと考えられます。

プロパガンダに騙されるな
―学び直そう戦争と憲法の歴史（七）

成瀬　和之

前回は、日本の近代史のはじめ、明治もまだ八年という時期の江華島事件から日本の朝鮮に対する武力行使が始まり、その時から、日本の不当な侵略の行為を隠蔽することと、他方、「国際法もわきまえない遅れた朝鮮」ということを、ことさらに強調し、「朝鮮の後進性を言い立てることで日本の侵略の事実を覆い隠す」という、内外の世論を欺く操作が始まっていたことを見ました。

今回は「内外の世論を欺く操作」に関連して、「お札」（紙幣）を通じて考えてみましょう。

どこの国でも、紙幣にはその国の歴史的な人物像が印刷されているのが普通です。日本の紙幣にはじめて人物像が印刷された、その第一号は誰でしょう？「神功皇后」です。「神功皇后」って何者でしょう？なぜ、第一号が「神功皇后だったのでしょう？

「神功皇后」といえば「三韓征伐」の立役者として『古事記』や『日本書紀』に出てくる「仲哀天皇」（実在が疑われる）の皇后、応神天皇の母とされる人物です。この「神功皇后」自体も伝説上の人物で、実在が疑われています。

『古事記』や『日本書紀』には、「仲哀天皇の死後、新羅を打ち、百済、高句麗を服属させたという記述があります。これをもって、後世に「神功皇后の三韓征伐」と言いふらされました。あたかも大和王権の日本が古くから朝鮮を征服支配していたかのような話には、この「神功皇后」が主役として必ず登場することになります。

明治以降、日本の朝鮮侵略が進み、「韓国併合」にいたるのですが、それ以前もそれ以後もアジア太平洋戦争の敗戦まで、学校教育はもとより多方面で日本が大昔から朝鮮を支配してきたかのように日本人に思い込ませるため、かならず登場していた「人物と説話」です。今でも大阪の住吉大社など、全国の数多くの名だたる神社の祭神として名残をとどめています。『韓流ドラマ』の「歴史解説本」を見ていたら「歴史年表」に史実のごとく「神功皇后」や「三韓征伐「が書かれているのに出くわし、驚きました。『歴代天皇総覧』（笠原英彦著、中公新書）でも第一代神武天皇から第一四代仲哀天皇までは「古代の天皇」以前の「神話時代の天皇」に分類されています。この本はアメリカ仕込みの実証主義的な史学の立場です。

アジア太平洋戦争の敗戦後、アメリカの日本占領によって、神話にもとづく教材は、一転して禁止されましたから、打って変わって、戦後の教育では「神功皇后の三韓征伐」の話はもとより、その話が日本の近代でどんな役割を果たしたのか、ということも含めて、いっさい学校では、この「神功皇后」や「三韓征伐」の話は「ご法度」になりました。

しかし、明治以後、この話がどんなに日本人の頭に刷り込まれてきたか、その果たした役割を歴史的にきちんと理解して、子どもたちにも教えておくことが、きわめて大切な課題となってきました。なぜなら、戦前の教育を受け侵略戦争に動員された戦争体験世代が少なくなってきて、「神功皇后」など知らない世代が多数派となり、ヘイトスピーチの横行など、かえって「知らない」ことに付け込まれる余地が生じてきたからです。

この「神功皇后の新羅征伐」の話を信じると、朝鮮に勢力を及ぼしたのだから、その前に中央集権的統一国家が成立していたはずだという、日本古代史の錯覚をもたらすことになります。日本において中央集権的統一国家が形成されたのは、天武＝持統天皇からです。天智天皇の時に初めて日本に「時代を測る」暦が導入されました。まだ「日本」という呼称は存在せず倭と呼ばれていました。「天皇」の呼称も存在せず、連合王国の「王の王」つまり「大王」（おおきみ）と呼ばれていたのですから。中央集権国家がなければ「国境」もなく、百済や新羅などと倭国との間では、日本海を通じて自由な往来が行われていたのですから。つまり、この「神功皇后の新羅征伐」の話は、ゆがんだ古代史像にとらわれることに行きつきます。

「神功皇后の三韓征伐」の話をはじめ、天皇の祖先が日本史のはじめから朝鮮を支配していたかのような神話は、壬申の乱という権力闘争に勝って、古代日本を打ち立てた天武＝持統天皇とそれを取り巻く貴族たちによって編纂が始められました。『古事記』の完成は七一二年、『日本書紀』の完成は七二〇年になります。

注意すべきなのは、その貴族たちの中に、唐と新羅によって滅ぼされ日本列島に亡命してきて大和王権に庇護され重用されてきた百済の貴族たちが「架空の話」づくりに加わっていたということです。詳しく知りたい方は『日本人の明治観を正す』（中塚明著、高文研）をご覧ください。

高句麗建国を描いた『朱蒙（ちゅもん）』という韓国ドラマには「八咫烏（やたがら

す）」が出てきます。初代「神武天皇の東征」を導いたとされる、あの三本足の「八咫烏」です。あれっと思って調べたら、「八咫烏」の起源は、さらに中国にまで遡ります。

高句麗の始祖神話では、朝鮮半島の初代大王である朱蒙の父は天帝で母は「河の神」の娘とあります。「神武天皇」の父は天から下った神の子孫で、母は海神の娘です。どう考えても日本神話と朝鮮半島の神話は似ているとしか言いようがありません。韓国を代表する歴史学者、盧泰敦（のてどん）氏の説が、『日本人の明治観を正す』（中塚明著、高文研）に紹介されています。

なぜ百済の貴族が、このような日本の神話づくりに積極的に関与したのか？百済滅亡後の「百済復活」のためには、軍事力を失った貴族は大和王権の軍事力を頼まざるを得なかったと考えられます。その結果白村江の戦いに行き着きます。

さかのぼると、久米邦武という東京帝国大学教授は、既に一八九一年に『神道は祭天の古俗』で神道は東アジアの習俗との類似性を指摘し、国家主義者の猛烈な反発を買い、免職になっています。このようにして、歴史学者たちは「触らぬ神に祟りなし」となり、「菊タブー」が形成されていきます。

古代の話は遠い昔の話ではありません。近代、現代とつながっているのです。

明治政府は、「日本が保護しないと、朝鮮は中国やロシアの食い物にされ、日本の安全は守れない」という「新たな神話」を、日本の朝鮮侵略を「正当化する」のと、日清・日露戦争で日本が朝鮮に対してどのように振まったのかを覆い隠すための「理屈」＝手段として利用したのです。

また、日清・日露戦争前後から、福沢諭吉をはじめとする一流の知識人たちが朝鮮の停滞論・堕落論を広めるのに加担してきたのです。

もちろん、「近代日本の朝鮮半島認識の責任をすべて『日本書紀』に負わせるのではなく、誤りの所在を明らかにするためには、日本の全時代にわたって、『日本書紀』を利用して捏造・歪曲してきた実態を明らかにする必要がある。そしてそれらを積み上げた上で検証していかなければならない問題であろう。」（黒田洋子書評「新しい歴史認識をめざして盧泰敦著『古代朝鮮　三国統一戦争史』を読む」、『弘前大学国史研究』二〇二一年）という指摘に注意する必要がありますが。

戦争プロパガンダに騙されないためには、日本の古代史と近代史の「二重の隠ぺい、改竄」を克服し、日本史を根本から学び直す作業が必要となっているように思います。小手先の対症療法では、今日のヘイトスピーチ、統一教会の問題など「現代日本の闇」の根源に迫れないのではないでしょうか？

わかりやすい入門書としては『これだけは知っておきたい　日本と韓国・朝鮮の歴史　増補改訂版』（中塚明著、高文研、二〇二二年）がお薦めです。

以下は、「ふみの道草（52）」12ページからの続きです。

鬼怖し人面の鬼なおこわし
旬の人の旬の話はコクがある
人というかたちの脆さしたたかさ
動物園動きまわるはヒトばかり
立ち止まるゆっくり人が見えてくる
尊敬をされると生きていきにくい
人間の余命は謎のままがよい
どん底で知る本当のお人柄
賞味期限切れることない人の味
抗菌グッズまとい人間臭が消え
嘘をつくから人間がおもしろい
人間万歳青空が好き人が好き
腐るなにんげん敗者復活戦がある
四捨五入切ってしまった人間味
武器捨てた日から人間取り戻す
人間は敷かれたレール走るだけ
裏方は裏方のまま虹を見る
役職を蹴り人間を取り戻す
裏方に徹した人の顔がよい
三顧の礼で迎えた人が邪魔になる
罪いくつなお人間であらんとす
生い立ちの中に残った傷の跡
欲あって封をする人外す人
人間のシングル盤も楽じゃない
マニュアルに人間の性書いてない
いい汗をかいて人間らしくなる
塩コショウ砂糖も足して人間味
人間が人間を見る立見席
人間のぬいぐるみです恋もする

前の二十年の句に比べると、人間であろうという思いが前面に出た句が多いようにみえるがどうだろうか。現在、直近二十年間の一万句集が編まれようとしている。どんな人間の句が読めるか、楽しみである。

百花斉放人間図鑑五七五
歯車と言えば総理もその一人
人間のぬいぐるみ着た鬼もいる
人間を撮る人間が撮る鬼が撮る
人間を詠えばこぼれ出る笑い

人間をどううたうか、川柳は人間諷詠であると言いながら、それは永遠の問いであるとも思う。

俳句

土田　裕

留守がちの隣家木犀よく匂ふ
無為の身のうしろめたさや虫の秋
酒の味深みを増して白露かな
高台に住みていくとせ鱗雲
街灯の届かぬところ虫の声

影山　武司

秋の日をするり伸びたる亀の首
手の甲をさらさら浸す秋日かな
桔梗の触れてはならぬ蕾かな
ペテイナイフにしやりと手応へ梨を剥く
秋簾古刹の庫裏に夕日陰
じやんけんで登るきざはし秋高し
空青し語尾の途切るる法師蟬
名月の闇を濃くして昇りけり
日の丸の朱色鮮やか敬老日
潮騒の朝風に乗り新松子

編集後記

SK生

▼いつまでも暑い毎日が続くと考えていたら急に寒さがおそってきた。夏物から冬物へとあわただしく取り替えることとなり、秋はいつあったのかと考えてしまう。今年の紅葉はどうなるかと気をもんではみるが、気象学者によれば温暖化により日本は徐々に四季の国から二季の国になりつつあるとか。常夏の国で日本の四季を懐かしんでいたのが「かつて自分たちの国には春の次に夏、夏の次に秋、秋の次に冬、そして冬の次には春があったんだよな」と言い合う未来が現実味をおびてきた。

▼そうした地球全体ともいえる危機の中、プーチンの狂気ともいえる執念に端を発した戦争がウクライナの地で相変わらず続いている。先日の新聞に町田市の古賀公子さんの次の短歌が載っていた。

いつの日かゼレンスキー氏の背広着る日が来ることを祈り待っている

莫大な富が失われ、多くの人が傷つき死んでいく戦争。まったく古賀さんと思いを同じくするが、地球の裏側に住む人間としてはすることが限られており、ヤキモキするばかりである。先の世界大戦が終わってから77年。その後、大小いくたの紛争で多くの犠牲者を出してきた。そして、ウクライナ。悔い改め続ける存在に運命づけられた生き物――その名は人類というべきだろうか。

▼そんな感慨にふけっているあいだにも諸物価のすさまじい値上げが続いていく。ますます頭をうなだれるという状況であるが「虹を見たければ頭をあげて、さあ」とやさしくささやいてくれた今は亡き喜劇俳優の言葉を思い出す。

虹立つと　人の話を　さえぎって

雑誌「世界」に載った千場達矢さんの句である。精神が萎え生活が苦しいときほど空の虹を美しいと見あげる心の余裕がほしい。ほら、虹があそこに、と。

アサギマダラとフジバカマ

白花曼殊沙華

ススキ

人間になろう日が暮れ陽が昇る

表題は、大分県川柳界の祖・内藤凡柳の句である。凡柳は、大正七年（一九一八）、大阪で丁稚奉公をしていた十七歳のときに川柳に出合い、番傘川柳の祖・岸本水府の門を叩いた。水府直門第一号である。

我が生くる幸志高の地由布の天
生まれきた裸の外は世のめぐみ
世の母の心の中の観世音
よき伴侶とはユーモアのわかる妻
無から有を生む十七字わがいのち

などの句もある。人間諷詠としての品格のある川柳を貫いた人であった。

凡柳の表題の句を意識してであろうと思う、高野千久のこんな句もある。

人間になろうと書いたまま暮れる

それはさておき、前回は「少年」が川柳にどう読まれたか、その変り様を紹介した。時代とともに「人間」のあり方もずいぶん変ったと思うが、川柳にはどう表れているだろうか。先ずは、『川柳番傘』誌の一九六三年一月号から一九八一年八月号までの一万句を集めた句集の中の『人間』の項に掲載された四十五句である（作者名は略）。

掌を合わすとき人間にかえるとき
人間が一つずつもつ蛍の光
人間に分解掃除したい年
人間をみがくに長い月と日と
人間のドラマベッドへつづく旅
捨て石のつぶやき誰も聞いていず
腹芸の使える人について行き
失対の中で毛並みがなんになる
井のなかの蛙のなかにある派閥
狼になれる素質は持っている
疲れたと言う人間の逃げ言葉
悪党は住めぬと誇りもつ山谷
えげつない奴の背中をあごでさし
大自然この頃人が恐くなり
人間のエゴ種無し西瓜食う
人間を買われ檻から出られない
学力の落差をうめる人間味
かっこよくなんて人間死ねはせぬ
人間は背中に過去のかおをもち
ここまでの知恵人間は手を合わせ
忘れたい人へ結び目が解けず
押されたら出る気わたしはチューブ入り
虚像からうろこ一枚落ちた音
悪いこともう出来ぬ叙勲され
人間の欲の一つに安楽死
人間の旗かも知れぬ下着干す
朱肉あざやかに人々縛られる
人生きる限り尽きない正誤表
大正の苦労昭和があざ笑う
一言えば十知る勲章持たぬ人
手を拭いて出れば道聞くだけの人
人ひとり死ぬ寂しさの硯箱
人ひとりおまえもやはり歯車か
人垣はみな無気力な傍観者
分かる分かるとこの人も頼りなし
忌憚なき意見を求め腹を立て
本当の通は出たらめ聞き流し
倒れそうなのはつっかい棒のほう
人間砂漠転んだ人をふり向かず
届けよういや届けまい目撃者
かげながらなどと頼りにならぬ人
人ひとり救う話は金のこと
人間をやめたい辞表誰に出す
人間の無力テーブル叩くなり
二物もつひとあり天の依怙ひいき

人間の弱さ、愚かさ、はかなさ、諦めのようなものが川柳らしくうたわれている。そうした人間であるということへの、どうしようもない共感の思いが根底に流れているが、人間を規定するものへの一撃は無い。

その後の二十年間（一九八一年九月号から二〇〇一年八月号まで）の句の中から集めた次の一万句集の中の『人間』のうたにはどんなものがあるか。

朝がくるまた人間をしなければ
損得を言うて人間くさくなる
人間で良かったなどと言えません
すぐ白線の外に出たがる人間よ
人間不信やがて稲穂が立ち枯れる
やさしさに触れて人間らしくなる
にんげんが好き飽きもせず懲りもせず
人間を止めたがらない斬られ役
人間が好きで寄り道ばかりする
結局は一人ポッチの綱渡り
注意しても人間枯れるときがくる
人間になろうと書いたまま暮れる
人間と別に商品価値がある
正座して書く人間の詩を書く
要求を飲んで人間すてました
人間を素足になって取り戻す
人間にまず差をつけたのは神だ
死ぬまでは人間してるほかはなし
自分史を書きながら行く蝸牛
爽やかな一生自分史に綴じる
人間にもどしてくれる夜がくる
天下りさせ人間のリサイクル
どん底でみた人間の裏表
幸せの脆さ人って小さいな
人は人に疲れていつも風の中

以下の文章は１０ページに掲載されています。